
当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

共同研究課題

「ダイナミズムとしての生—情動・思考・アートの方法論的接合」

第8回研究会要旨 (2019年5月25日)

「ビャンス及び周辺地域の「太鼓演奏」について—境界、美学、情動」

名和克郎 (文化人類学・東京大学)

本発表は、極西部ネパールからインドのウッタラーカンド州のヒマラヤ地帯で見られる「太鼓演奏」の諸相を、本研究プロジェクトの基本的方向性を私なりに引き受ける形で、多面的に分析しようとするものであった。

まず本発表が取り扱う「ビャンス及び周辺地域」と「太鼓演奏」について予備的な限定を与えた後、そこで限定された範囲での「太鼓演奏」のありかたを概観した。用いられる打楽器は、ティンパニーのような形をした大太鼓と小太鼓、シンバルに限定されること(ただし一部の村では特定の儀礼において、通常の大太鼓に代えて両面の大太鼓が用いられる)、演奏は主に儀礼の前及び最中、また儀礼の中での移動時になされること、及びリズムのパターンとして大きく分けて3つのものがあり、そのうち一つは人々の歩きながらの移動、もう一つは一列になっての踊りながらの移動において典型的に演奏されることを示した。次いで、誰が「太鼓演奏」を行うかについて、少なくとも男性である限り特段の制約があるようには見えないが、最重要な場面で中心的に太鼓を叩くのは、ビャンス及び周辺地域の主要な住民(「ラン」という民族名称を自称する)ではなく、村人にはあるがより南方のヒンドゥー社会の一部に起源を辿る、鍛冶屋兼太鼓たたきの人々であることを指摘した。

以上を前提として、発表の後半では、ビャンスの「太鼓演奏」が人々の情動を喚起するという事態について、(1) 叩き手自身と、演奏が曖昧に represent するものとの間の関係のねじれ、(2) 太鼓演奏がとりわけ熱狂と結びつきやすい幾つかの状況(とりわけ、練り歩きながらの踊りと、大太鼓奏者による躍りながらの演奏)と、近年における不確実性を統御しようとする方向での変化、(3) 太鼓のリズム自体と、そこに見られる「即興性」、の三点を手掛かりとして、採譜を含むビデオデータの詳細な分析を元に、予備的な議論を試みた。

「記憶の場、その表層におけるつながりと断絶—ルーマニアのロマの家屋と音楽の事例より—」

岩谷 彩子 (文化人類学・京都大学)

1990年代以降、市場開放後のルーマニアのロマの間でマネレ (*manele*) という音楽が出現し、御殿のような家屋が建設されるようになった。過度に装飾がほどこされ、お互いに豪華を競うその家屋は「御殿」「お城 (*kastello*)」と呼ばれている。それは反復と持続を目指す伝統建築や、機能性とデザインを追求した近代建築でもなく、安定や恒久性を求めることなく、常に現在の住人の必要性や流行にしたがって形を変え、未来に開かれている。その御殿でロマたちが集まるときに流れるマネレは、主にロマが従事するポピュラー音楽である。マネレで歌われるのはロマのエスニシティでもルーマニアの農民音楽でもない。その旋律はトルコやバルカン諸国の音楽に強く影響を受けたものであり、歌われるのは社会変化の只中で運やお金に翻弄される人々の欲望であり、ロマのみならずルーマニアの市場開放の影響で経済的浮沈を経験している階層をオーディエンスとしている。いずれの表現も、第二次世界大戦中のトランスニストリアでの強制連行によってすべてを奪われた彼らが、形をとどめない過去と不安定な未来を、知覚可能な形で現在化させる方途であり、その表面でうごめく情動を形にしたものであるといえる。

本報告では、前半部でルーマニア南西部のストレハイアに林立するロマ御殿の建築様式とそれが可能になった背景、死者の遺品を置く空間と未使用の空間から、ロマ (カルダラリ) のコミュニティや家族の「内」と「外」の表面として家屋が機能している様相を明らかにした。そして後半部では、ロマ御殿で演奏されたり発信されたりするマネレが、ロマ・コミュニティの「内」を歌うことでコミュニティ内に顕在化している「外」を表面化し、それを聴く人々の情動にはたらきかけ新たな結びつきを創出している側面を紹介した。ロマによる建築と音楽の表層性には、このようにコミュニティの「内」と「外」を再配置し新たにつながりをつくり出す情動の力を読み取ることが可能ではなかろうか。

『夢が人を食う』: 或るアフリカ社会における『影』と『情動』

岡崎彰 (文化人類学・AA研フェロー)

この発表では、(1) スーダンのガムク社会における「夢」の特異な存在論的様態に関する問をきっかけに、(2) 西欧での夢の非社会化・内面化の歴史をフーコーの議論に依拠してデカルトからフロイトまでざっとたどり、(3) その経緯を「情動」的経験と

その言語的表現との関係に認められる「中動態」の歴史性に関する最近の議論と関連付けて再考し、(4) 啓蒙時代 (Lumières) の「光」の下では見えにくい、ガムクの「影」という多義的事象を想像する試みを行った。

(1) ガムク語には「夢を見る」とか「夢を持つ (英語)」という表現はない。夢は見たり持ったりする対象ではなく、夢経験は「夢が人を食う (襲う) *caalk nam ok*」とか「夢に食べられた *caalk namsa*」としか言えない。夢は個人の内部で生ずる生理的現象ではなく、外部から襲われるようないわば啓示的経験である。そして夢は「影」の世界での出来事の経験であり、社会的に重要で、人々はいつでも人の夢を注意深く聞くのが当たり前で、自分と関係ない夢でも、誰かに関係ありそうな夢ならその相手に報告する義務すら生じる。

(2) このような夢の外在性・啓示性は、実はデカルトも「方法序説」を書く前に経験していたが (田中仁彦『デカルトの旅・デカルトの夢』)、それ以降、西欧では夢は内面化・非社会化・無意味化の歴史をたどり、フーコーの『狂気 (フォーリー) の歴史』によれば、「フォーリーと夢の排除によって理性が確立された」。一方『言葉と物』によれば、こうして無意味化されたはずものが亡霊のごとく蘇り「コギトと思考されえぬもの」「二重の主体」として、理性的自律的主体だったものを執拗に脅かすものにもなり、フロイトはそれを「無意識」として「発見・発明」し治療の対象としていった。この経緯は「中世哲学に悪者になってもらえば、近世哲学は光に満ちた時代となる。しかし増えた光は増えた光と同じだけの闇を増やすことになる。光だけが増えることはない」(山内志朗『「誤読」の哲学：ドゥルーズ、フーコーから中世哲学へ』)ともいえよう。

(3) 夢経験だけでなく、ガムク語の「情動」に関する経験の言語的表現には、一見して能動態より受動態的表現が圧倒的に多い。例えば「怒りに食べられた」、「恥ずかしさに捕まった」など。ただし、國分功一郎の『中動態の世界：意志と責任の考古学』によると、古代には「能動態と受動態」の対立がなく「能動態と中動態」によって構成されていた言語があり、その言語には「する」と「される」の対立もなく、よってそれが話されていた世界には意志 (と責任) もなかった。確かにガムク語の表現にはこのような意味で「中動態」と呼べるものが多く、この議論は興味深い。もちろんここには「言語表現は思考の可能性を規定するか」という人類学者にはおなじみのサピア＝ウォーフの仮説系の問題もあるが、この「中動態」の歴史に関する議論はフーコーの自己規律的主体の歴史と合わせて考察するとより説得力を増すと思われる。

(4) このような西欧の主体の歴史に関する研究を援用することで、啓蒙時代 (Lumières) の「光」の下では見えにくい、ガムクの「影」のような多義的事象を想像する試みを行った。